

## ごあいさつ



公益社団法人 日本 WHO 協会

理事長 関 淳一

WHO では、昨年 7 月よりテドロス新事務局長体制がスタートし、日本からは山本尚子氏が UHC\* (Universal Health Coverage) 及びヘルスシステム担当の事務局長補として就任されております。

昨年 12 月、東京に於いて開催された「UHC フォーラム 2017」に際して、テドロス事務局長も来日されて、開会式でスピーチをされました。スピーチの中で、テドロス事務局長は、癌になった彼の友人が、家族の将来の生計の為に貯えた全財産を高額の治療費の為に使って治療を受けるのか、治療をあきらめて死を選ぶのかの二者択一をせまられて、治療をあきらめて死を選んだ例を挙げながら、このような、あってはならないケースは、世界で年間数百万例以上ある事実を示し、WHO が取り組むべき課題としての UHC の重要性について述べています。

私も、UHC は人類共通の目標であり、国民皆保険を実施している日本においても、現実の問題として、実行の状況について、常に考える必要があると思っております。

昨年 12 月 6 日に、当協会主催のフォーラム「認知症を考える」を開催いたしました。

人口の高齢化に伴い、認知症の人の数は、世界で 5000 万人とも推定されており今後の急増が予想されています。又、認知症は当事者だけでなく、介護する人、家族、そして大きくは社会に対して、極めて大きな負担をかけています。

今回のフォーラムでは、講師として大阪大学精神

医学科の池田学教授と浅香山病院の精神保健福祉士の柏木一恵先生に御講演頂き、現在の認知症に関する正しい知識を分かり易く話して頂きました。

今回、当機関紙 65 号を発行するに当たり、そのご講演録を掲載させていただきました。是非、御一読頂きたいと思います。講師をお努め頂きました御二人の先生に、この場を借りまして、改めて厚くお礼を申し上げます。

また今回は昨年 9 月から 3 か月間に亘り、ジュネーブの WHO 本部に於いて、インターンシップを経験されました、石川祐実様に、その時の貴重な経験について、ご寄稿頂きました。

また、この度、秋田大学医学部 3 年の宮地貴士様に、アフリカのザンビアでの、診療所建設プロジェクトに参加された非常に貴重な経験についてご寄稿頂きました。

これらの若い方々の若さに溢れたレポートを一人でも多くの若い人たちに是非読んで頂きたいと強く思いました。

今回「目で見る WHO」第 65 号を発行するに当たり、ご協力を頂きました皆様に心からお礼申し上げます。

(平成 30 年 2 月)

\* UHC とは「すべての人が、適切な健康増進、予防、治療、機能回復に関するサービスを、支払い可能な費用で受けられる」ことを意味し、すべての人が経済的な困難を伴うことなく保健医療サービスを受用することを目指しています。